



愛知淑徳大学

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

Newsletter

3号

発行年月日：1997年5月30日
〒480-11 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9
Phone 0561-62-4111 EX 498
FAX 0561-63-9308
E-mail : igws @ asu.aasa.ac.jp

平成8年度文部省委嘱事業 ジェンダー・女性学セミナー ～青年男女の共同参画をめざすために～ 完了報告

文部省の1996年度委嘱事業「青年男女共同参画のセミナー及び調査事業」が無事終了した。この事業は愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所、愛知県、愛知県教育委員会、愛知県女性総合センターの共同事業として実施された。事業内容について詳細な報告書を刊行した。委嘱事業内容は3つの開催事業と1つの評価研究調査及びガイドライン作成の5つからなる。

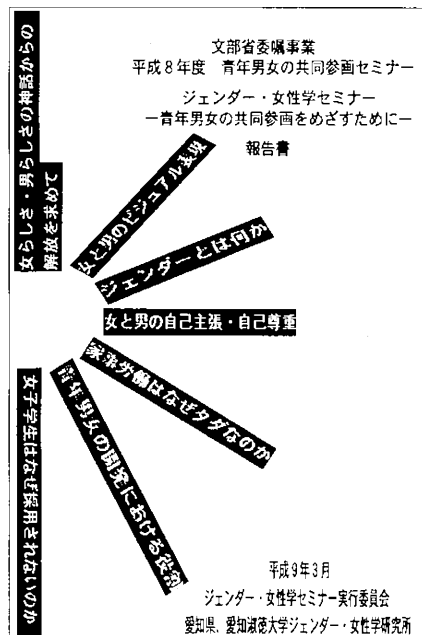
開催事業 1

1996年9月5日～7日の2泊3日の公開集中講座である。60名の青年男女の参加を得て、愛知県青年の家において「女らしさ、男らしさの神話からの解放をもとめて」というテーマで開催された。まずジェンダー・女性学領域の問題に気付くためのコンシャスネス・レイジングから始め、ジェンダー・センシティブな視点から視聴覚メディア分析などを行った。さらに労働問題として「なぜ家事労働はタダなのか」についての理論的解説を行った。宿泊講座の利点は講座終了後の交流で参加者どうしが語り合い、親交を深められることである。このような機会に青年男女がジェンダー・女性学関連の問題を率直に討議できたことに大きな意義がある。

開催事業 2

1996年12月14日に愛知淑徳大学国際交流会館にて「開発と女性」をテーマに30名程の参加者をえてワークショップを開催した。開発途上国と先進産業国の対立、この問題についてジェンダー：社会・文化的性の視点からアプローチした。ネパール、バングラデシュについて現場で医療問題、法律問題にかかわっている専門家から実態とその問題点を聞いた。また開発におけるジェンダーの問題をいかに理解するかについての教育実践の試みの事例も紹介した。この領域については未だ情報は少なく、青年男女が問題意識をもって開発問題とジェンダーの関係について理解できたことが収穫であった。

文部省委嘱事業 報告書冊子



上記の冊子または別冊「文部省委嘱事業 学生意識調査報告書」入手ご希望の方は、ジェンダー・女性学研究所までお申し込み下さい。
(冊子無料、送料実費負担)

開催事業 3

最後の開催事業として講演とシンポジウム「青年男女の共同参画をめざして～女子学生の就労と男性の生活自立への道～」を愛知県女性総合センターにおいて開催した。

基調講演の講師に東京大学の沢真理さんを招き「女子学生はなぜ採用されないか？」について産業構造の変化、新日本的雇用の問題点について学習した。そのあとシンポジウムでは青年男女も交えて、男女の共同参画のためには女性のみならず、男性の意識変革も不可欠であることが確認された。100名程の参加者による熱心な討議、活発な質疑応答がされ、充実したシンポジウムとなった。いずれの事業も愛知県、愛知県教育委員会、そして愛知県女性総合センターからの協力をえた。とりわけ広報、会場設定などについては極めて有用な助言をいただき、無事開催事業の全てを盛会のうちに終了できた。

ジェンダー・女性学関連講座履修学生の意識調査

今回の委嘱事業のなかに開催事業だけでなく、大学での女性学関連授業が学生にどのような影響を与えているかについて教育の評価研究を実施した。1996年前期の授業の前後に女性学関連講座履修学生と非履修学生の両方について質問票による調査を実施し、組織心理学などの専門家とともに分析した。その結果これらの講座が青年男女の共同参画推進に有用であることが実証された。詳細の調査報告書を別に刊行する。

青年男女の共同参画教育のためのガイドライン作成

以上の3つの開催事業、および評価研究としての意識調査の結果を総合して、今後青年男女の共同参画を推進するための教育とはどのような点を押さえる必要があるのかについて事業の成果、課題をもとにガイドラインを作成し、報告書に含めた。

1997年2月15日開催：講演とシンポジウム

「青年男女の共同参画をめざして」に100名の参加

文部省委嘱事業「ジェンダー・女性学セミナー」の最終事業

2月15日、「ウィルあいち」に於いて「青年男女の共同参画をめざして」と題して、講演とシンポジウムが開催された。会場をびっしり埋めた参加者、予定時間を大幅に超える熱心な意見交換と、文部省委嘱事業の締めくくりにあふさわしい充実したものになった。

前半は大沢真理さん（東京大学社会科学研究所助教授）による「女子学生はなぜ採用されないのか？—日本企業のジェンダー構造とその変革の道—」と題する基調講演が行われた。

大沢さんは、市場経済が地球規模で広がり深まっている状況と、それに対応するためにこれまでの日本的システムに代わるものとして登場してきた「新・日本的経営」を、ジェンダーに敏感な視点でみるとどこに問題があるかをていねいに分かりやすく説明した。その上で、日本が厳しい状況にあることは確かであるが、進められようとし

ている構造改革の中にはリスクもあるがチャンスが広がるという面もあることを述べる。例えば、年功制が崩れるということは、ある意味では女性にとってチャンスが広がるということである。とはいえ、ひとりでいくら頑張っても労働力を買いたたかれてしまうわけで、いま必要なことは、女性たちが協力して、買いたたかれぬよう情報を交換して互いに支え合うことであると結ぶ。

後半のシンポジウムは、大沢真理、上村千賀子（国立婦人教育会館事業課長）、渡辺孝治（立命館大学学生）、西崎光代（名古屋大学大学院生）の4人のパネリストによる発言とフロアとの意見交換で構成された。

上村さんからは、青少年のジェンダー教育のプログラム作成に関わった経験から、今日の青少年教育をめぐる状況の把握には、学校の平等幻

想、制度整備、物質的豊かさと少子化、専業主婦によって愛情豊かに育てられた世代としての特徴を理解する必要が述べられた。渡辺さんからは、自らの成長過程における家族と個人の関係、父母像、経済活動の一環としての個人のあり方から、男女に関わらず経済的・生活的自立が必要であると考えるに至った体験と思考の経緯が語られた。西崎さんからは、従来見過ごされてきた大学におけるセクシャルハラスメントの実態に関する調査報告と、各大学でのそれに対する取り組みの活動が紹介された。大沢さんは、基調講演の補足として、メガコンペティションの時代において個人や企業、国家間の競争をそのまま放置することは、これらの存立基盤となっている地球そのものの破

壊につながることを強調した。

続いて、以上の報告に対してフロアから多岐にわたる質問が寄せられ、各関連項目についてパネリストが応答した。今日の企業社会における競争と生産効率の実態に関する質問に対しては、大沢さんから、企業や国家の枠組みを越えた持続可能な発展は、男女の共働きなしにはありえないことが述べられた。また、生徒や家庭への働きかけに関する質問に対しては、上村さんから、教師の意図的直接的指導以上に隠れたカリキュラムと家庭教育の重要性が指摘された。男女の共同参画に関する4つの異なる視点からの問題提起とフロアとの質疑応答など、充実したシンポジウムとなった。



（写真）シンポジウムにて

1997年度愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所 事業計画

1. 研究会、シンポジウム開催

1-1. 年2回の研究会の開催

第一回目：1997年7月25日（金）18：30～21：30

報告1「ジェンダー視点からの日系女性移民史-『写真花嫁』について」

報告者：柳沢幾美（本学修士課程修了、愛知学院大学院生）

報告2「ジェンダーの視点から見るアメリカの社会福祉の実態」（仮題）

報告者：杉本貴代栄（金城学院大学教員）

1-2. シンポジウム開催

テーマ：女性の労働環境は改善されたか

2. 「開発と女性」についてのシンポジウム

名古屋大学、日本福祉大学との共催：文部省委嘱事業への協力

3. ニュースレター刊行

年2回の刊行：4、5号

4. 情報収集、提供

書籍・資料等収集及び貸し出し、閲覧

*学内LANが研究所に接続されたのでインターネットを通じて世界のジェンダー・女性学関連情報を収集し、研究に供する。



『ジェンダー・女性学研究所への期待』

松本青也

中・高と男子校に育った私は、自分に娘が生まれるまで、女性の身になって世の中を考えたことなど、一度もなかった。それでも、二人目の娘が生まれたときに、妻の両親が申し訳なさそうにしていることに気づいたり、娘がおもちゃ屋で「ごめんね。女の子用のロボットはないのよ」と言われてしょんぼりしているのを見たり、幼稚園での遊戯が男子とはまるで違うのに驚いたりしているうちに、いつしか性差別や性別役割分業を当然のこととする社会通念に気づき始めた。アメリカの大学でWomen's Studiesを聴講したのもその頃である。そうなるとう度は、教室の女子学生達が、結婚して子供を産むところまでしか考えていないことが無性に気にかかる。彼女達にぜひライフサイクルの変化や専業主婦になることの本当の意味を考えさせようと、同僚と話し合っ「女性論」の授業を始めた。もう10年以上も前、前任校でのことである。本学でも、赴任する前に非常勤講師として「女性と社会」の何コマかを担当した。

今でもゼミ合宿では、必ず女性の生き方について話をするにしている。すると決まって出てくる感想が、「今の講義を男性にこそ聴かせたかった」というものだ。その点、この大学で男女と一緒に「女性学・男性学概論」や「現代社会とジェンダー」などを受講できるのは素晴らしいことである。その上『ジェンダー・女性学研究所』がジェンダー研究や女性学に関する情報収集や提供を行ったり、啓蒙のための色々なイベントを開催しているのは、この大学が最も誇ることができることの一つと言える。

生物学的な性差を尊重し合った上で、古くからの固定観念を打ち破り、対等なジェンダーの関係を構築しようというのは、口にするのは簡単だが、勇気とこだわりを必要とする、かなりしんどい作業である。今日受け取った在籍学生数一覧表も、女性が圧倒的に多いのにもかかわらず、なぜか「男・女」の順に書かれていた。

『ジェンダー・女性学研究所』への期待は大きい。
(本学文学部教授)

「女性と情報」

国立婦人教育会館における女性に関する情報担当者研修会報告

文昌美

女性問題に関して知りたいことがあったとき、卒業論文を書きたいとき一人で悩んでいませんか。

- ・地元の大学で女性学・男性学の科目を設置している大学を探したい。
- ・国連での女性・ジェンダー関連情報に関する新聞記事を探したい。

あなたはそんな情報を得たいときにどのように調べ、探しますか。

平成8年12月9日～13日国立婦人教育会館にて行われた「女性に関する情報担当者研修会」は女性問題に関する情報を得たいと思った時に役に立つ情報ネットワーク全般についてでした。内容は公演・実習：「高度情報通信社会と情報担当者」、「生涯学習情報に関する最近の状況」、「婦人教育情報センターの利用について」、「女性と情報」、「女性情報システムの現状と課題」、等多岐にわたる幅広い情報と、それを取り囲む諸事項を網羅したものでした。

具体的に、点在する情報を収集し、共有化している国立婦人教育会館のWINET (Women's Information Network System) は、ジェンダー・女性学研究所もネットワークしていますが、これは平成8年から統計情報データベースも加わり、上記をはじめとする幅広い女性情報の検索や双方向情報交換が可能です。

情報の中でも女性に関する情報は絶対量が少ないといわれており、それは'75年の第一回国連世界女性会議の時点から今に至るまで指摘されています。アクセスの問題などまだまだ課題はありますが、研修全体を通して、その限られた資源を情報として集め、自らも発信者となってそのネットワークを構築してゆく必要性和その意味の深さを実感しました。

(ジェンダー・女性学研究所アシスタント)

日本文学とフェミニズム批評

中島美幸

女二人で、『Fifty:Fifty』というフェミニズムの雑誌を共同編集発行し始めてから8年になる。ミニメディアではあるが、全国の読者に向けて発信しているこの雑誌で、私はフェミニズム批評をこころみてきた。しかし、在野で研究をつづけていくことに不便を感じ、研究の場と時間とを持ちたいと大学院に進み、現在は本学の博士後期課程に在籍している。

大学や学会という学問の内側に実際に身を置いてみて、外部から見えていた以上にフェミニズムが浸透していないことに驚いた。ことに、日本文学研究におけるフェミニズム批評の位置付けは低く、無関心どころかフェミニズムに対するあらわな嫌悪感を示す研究者すらいる。しかし、英文学者の富山太佳夫氏の言葉を借りれば、「フェミニズム批評に関心を持たないということは現代の批評に参与する資格を放棄することである。男女の別に関係なく、研究する者としての条件を裏切るということである」（『現代批評のプラクティス 3 フェミニズム』）。つまり、フェミニズム批評が提起している問題は、女性のみならず男性にとってもきわめて直接的な問題であり、もはやフェミニズム批評に対して傍観者ではいられないのである。

日本文学研究においてフェミニズム批評が不当に扱われている背景には、現在の日本社会でのフェミニズム認識の低さがあるが、ほかにも日本文学の〈特殊性〉が幾つか考えられる。一つに、「国文学」という名称が端的に示しているように、自国中心の文学観である、そこでは「他者」は排除されている。「他者」とは、〈日本〉に対する〈他国〉であり、〈男性〉に対する〈女性〉である。つまり、「国文学」とは、日本人の、男性による文学行為なのであり、たとえ女性文学を研究対象としていても、父権制度の枠組みを無視するかぎりには、真に「他者」としての女性たちに出会うことはできないのである。

一方で、すでに10世紀に優れた女性作家たちを輩出した日本は、17世紀になってようやく女性作家が登場した英米に比べると、一見、女性作

家の先進国のようにみえる。しかし、「書く女」というタブーを破って女性作家が登場したことこそがフェミニズムの導火線の役割を果たした英米に比べると、日本の女性文学は、フェミニズムとは無関係な「偉大」な作品にまつりあげられてしまった。したがって、いわば父権制文化に篡奪された女性文学を、フェミニズムは再び女性たちの手に取り戻すことが必要なのである。

このように、種々の困難を抱える日本のフェミニズム批評ではあるが、その歴史は決して浅くはない。日本のフェミニズム批評の〈基本的枠組み〉を提出した二著作、駒尺喜美『魔女の理論』（1978年）、水田宗子『ヒロインからヒーローへ』（1982年）の刊行からはすでに20年になる。また、学会レベルでフェミニズム批評が初めて論じられたのは1986年のことであり、最近では、昨年、日本近代文学学会が学会誌『日本近代文学』第55集で〈ジェンダーを考える〉を特集した（ちなみに、同誌に拙論「日露戦争下の女性詩」を発表した。ご高覧のほどを）。現在、フェミニズム批評の成果は次々と刊行されており、また、女性作家の作品集・全集、女性作家辞典の刊行と、フェミニズム批評は着実にその厚みを重ねつつある。

さらに、学問の世界にとどまらず、多くの女性たちがフェミニズム批評に期待を寄せていることを社会教育の場などで実感する。男性作家の描くステレオタイプな女性像を打ち破り、新たな女性の物語を発見し提起するフェミニズム批評は、現実を生きる女性たちを内側から支える大きな力であることはいうまでもない。

（本学大学院文学研究科
国文学専攻博士後期課程二年）



『Fifty:Fifty』
(発行Click)

▲ ジェンダー視点からの日系移民史 ▼

柳沢幾美

今世紀初頭、約2万人もの日本人女性が結婚のため海を渡り、アメリカ合衆国に移住した。彼女たちは包括的に写真の交換だけで「写真結婚」した「写真花嫁」と呼ばれた。そして現地の白人たちに嘲笑され、排日運動の材料として政治的に利用された。従来の日系移民史によれば、彼女たちは「親の言うことに従い写真の交換だけで遠い異国に嫁いだかわいそうな『写真花嫁』」ということになる。しかし、ここには重大な誤解が潜んでいるのである。これは従来の日系移民史にジェンダーという視点が欠如していることに起因している。

他の歴史研究と同様、日系移民史においても女性性は主要課題としては扱われてこなかった。その中心課題は暗黙のうちに主として男性であり、女性が登場することがあってもほとんどの場合男性の周縁的立場における登場に過ぎなかった。女性たちを十分に組み込むことにより日系移民史を再構築し、その文脈の中でジェンダー視点により、従来の日系移民史を見直すことで、これまで見えにくかったり見誤ったりしていた事実を顕在化することができる。

このような視点で「写真花嫁」たちを再考察してみると、実際には「写真結婚」により海を渡った日系アメリカ人一世女性たちは、単に親の言うことに従ったのではなく、そのほとんどが自分の意思により渡米を選んでいるということがわかる。また、「写真結婚」をしたのは日系女性、男性両方であったのに、「写真花嫁」と呼ばれ嘲笑の対象になったのが女性の側だけであったという問題点も浮上する。「写真花婿」ということばは存在しなかったのである。

これらのことが見過ごされてきたのは、女性というものが意思を持たないということが自明視され、女性は自らを語らないいわゆる「もの」扱いられていたことが大きな原因である。それゆえ、彼女たちが「写真花嫁」と呼ばれ嘲笑されたことに対する社会的な人権侵害については不問に伏されている。

さらに、日系一世アメリカ人の中で、女性よりも男性の方がアメリカ合衆国における自分たちへの差別、排斥をより強く感じていたという事実も明るみに出る。例えばロサンゼルス日系人老人ホームでインタビューした日系アメリカ人一世女性たちは、それまでの人生を振り返り、「今はしあわせ。何もいうことない。」としか語ろうとしなかった。これは、女性は本国において女性という立場ゆえの差別をすでに経験しており、さらにアメリカ合衆国においてマイノリティーとして差別をされたとしても、差別を差別と感じられなくなっていたからであると考えられる。

日系アメリカ人一世女性たちはそのジェンダー的特性により日系移民史において中心課題とはなり得ず、その人権が無視されがちであった。またジェンダーにより沈黙を強いられてきた。彼女たちの人権を尊重し、彼女たち一人一人の立場からのジェンダーの視点による彼女たちの「生きられた歴史(Lived History)」を明らかにしていくことは、今後にもさらに必要であると思われる。

(愛知学院大学大学院文学研究科英語圏文化専攻博士後期課程、1997年3月本大学院コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻修士課程修了 修士論文：日系アメリカ人一世女性の歴史的考察 —ジェンダー視点からの「写真花嫁」を中心に)

＜主要参考文献＞

- 真壁和子『写真婚の妻たち—カナダ移民の女性史』（未來社、1983年）
工藤美代子『写婚妻—花嫁は一枚の見合い写真を手に海を渡っていった』（ドメス出版、1983年）
ウチダヨシコ（中山庸子訳）『写真花嫁』（学芸書林、1990年）
ウチダヨシコ（波多野和夫訳）『荒野に追われた人々』（岩波書店、1985年）
ナカノメイ（サイマルアカデミー翻訳科訳）『日系アメリカ女性』（サイマル出版会、1992年）
我妻令子・菊村アケミ『千枝さんのアメリカ』（弘文堂、1986年）
桑井輝子『外国人をめぐる社会史—近代アメリカと日本人移民』（雄山閣出版、1995年）
イチオカユージ（富田虎男・桑井輝子・篠田左多江訳）『一世—黎明期アメリカ移民の物語』（刀水書房、1992年）
戸上宗賢（編）『ジャハニーズ・アメリカン』（ミネルバ書房、1986年）
野村達朗『民族で読むアメリカ』（講談社、1992年）
Glen, Evelyn Nakano Issei, Nisei, Warbride; Three Generations of Japanese American Women in Domestic Service. Temple University Press, Philadelphia.1986

「産む産まない」女性の自己決定権

-私たちのアメリカ訪問記-

木村八恵
藤丸郁代

女性問題を考える上で、望まない妊娠をどのようにとらえるかは大きな課題である。特にアメリカなどでは宗教的なものが絡んでこの問題を複雑にしている。具体的には女性の権利として女性自身が中絶を選ぶことができるという考え方と胎児の人権を尊重することによって女性の自己決定権として中絶を認めないという考え方の2つの大きな流れがある。今回、春休みを利用してこの分野のNGO・NPOの実際の活動を見学した。見学したのはPlanned Parenthood Sacramentoと、ホストマザーのレベッカさんが参加しているBirth Connection Crisis Pregnancy Center（以下Birth Connection）の2つである。共に家族計画や妊娠・出産の面から地域の女性と関わっているが、その理念や活動形態には大きな違いがあった。前者はアメリカの中でも大きなネットワークを持つPrivate NPO（非営利組織）である。その活動は地域ごとに独立していた。サクラメントには7つのクリニックがあり、妊娠判定、婦人病／性病の検査、育児、家族計画のカウンセリングを行っている。ここでのカウンセリングは、医学的な立場と本人・家族の希望を重視している。中絶の割合は来所者の2%程であるということだ。

後者は、理事以外はすべてボランティアで運営していて、かつてはサクラメントとアーバン（Auburn）に事務所を持ち、サクラメントでは、家庭があり中絶を希望する人（家族）へのカウンセリング、アーバンでは、独身で経済的にも貧しく、自分では子供を育てられないため中絶を希望する人へのカウンセリングと妊娠判定テストを行っていた。ここでのカウンセリングは中絶が女性の心と体に及ぼす影響を考えて、できるだけ中絶は避ける方向に持っていくとのことであるが、私にはキリスト教の影響が大きいように感じられた。現在はこの2つを合わせて便利な場所に移転したいのだが資金不足で、目下事務所なしで携帯

電話片手にどこへでもでかけてカウンセリングをしている。

Birth Connectionは小さな活動であるがカウンセリングしたら放りっぱなしというのではなく、養子への措置をとるなどキメ細やかな対応をしていて感心した。ハイスクールにおいて妊娠、中絶についての衛生教育活動も行ってた。

今回、最も印象に残っているのは、ホストマザーが彼女にとってはあまり有り難くない存在であろうPlanned Parenthoodにも連れていってくれたことだ。「Planned Parenthoodはピルの使用や中絶を許可しているから、私達の理念にはそぐわないけれど、あなたが喜んでくれればそれでいいし、私も興味はあるから。」とイヤな顔一つせず連れていってくれた彼女の心の広さに感激した。

サンフランシスコでは、街中の本屋のみならず空港の小さな本屋にも、ゲイ、レスビアンのコーナーが（経済・法律などと同程度に）設けられていることに驚いたが、サンフランシスコという場所柄、それがいかに問題になっており人々の関心も高いかを垣間見た気がする。

望まない妊娠問題を抱えている女性に対し日本では、主に医療機関が相談の場になっているのに比べ、アメリカでは、民間レベルでの相談機関があり、パワフルな活動を行っていた。

今後の日米の共通な課題は、妊娠出産だけでなく若年から老年までの女性が自分の健康について自分で解決できるよう支援できる相互機関が必要であると思った。

（本学文学部3年、2年）



<写真：収集した資料等>

ジェンダー・女性学研究所研究会
のお知らせ

1997年7月25日(金) 18:30~21:30
 場所: 愛知淑徳大学 研究棟 2F k-1 会議室
 報告1「ジェンダー視点からの日系女性移民史-『写真花嫁』について」
 報告者: 柳沢幾美(本学修士課程修了、愛知学院大学院生)
 報告2「ジェンダーの視点から見るアメリカの社会福祉の実態」(仮題)
 報告者: 杉本貴代栄(金城学院大学教員)

1997年度後期愛知淑徳大学における
ジェンダー・女性学関連開放講座

現代社会とジェンダーⅠb 毎週木曜
～就職と勤労のジェンダー～ 15時～16時半

回	月/日	テーマ	講師
1	10/2	オリエンテーション	本学教授 小倉千加子
2	10/9	OLだけにはなれなかつた	落語家 桂 あやめ
3	10/16	私が30回転職した理由	講師 神田 茜
4	10/23	50回面接に落ちて、社長に	情報の輪サービス社長 佐々木敬子
5	10/30	再就職氷河期時代	
6	11/6	女性漫画に描かれた女の仕事	評論家 藤本由香里
7	11/13	国家公務員からホテル・マナージャーへ	ジャンピオホテル名古屋マナージャー 木下 弓子
8	11/20	ホテル業界の女性たち	
9	11/27	なぜ私は働き続けるのか	朝日新聞記者 近田 澄江
10	12/4	マスコミで女性が働くということ	
11	12/11	障害者と仕事の権利	ブロップ・ステーション代表 竹中 ナミ
12	12/18	self-empowermentと社会参加	本学教授 小倉千加子

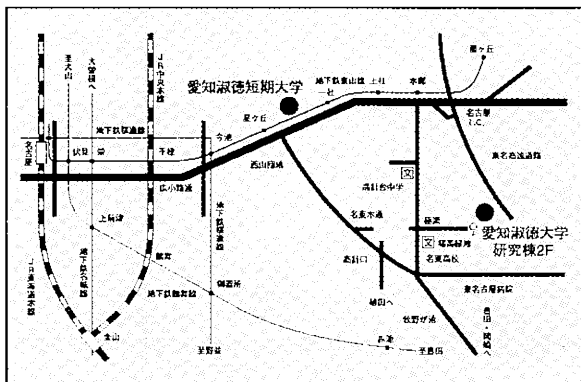
現代社会とジェンダーⅡb 毎週火曜
～開発とジェンダー～ 15時～16時半

回	月/日	テーマ	講師
1	10/7	オリエンテーション ～開発とジェンダーの視点とは～	本学教授 ジェンダー女性学研究会 園信 満子
2	10/14	開発実践論1	日本福祉大学助教授 大濱 裕
3	10/21	開発実践論2	
4	10/28	開発実践論3	
5	11/4	開発と保健	アジア保健研修所長/アジア保健協議会 川原 尚美
6	11/11	アジアの保健と開発1	アジア保健研修所員 林 かくみ
7	11/18	アジアの保健と開発2	
8	11/25	ジェンダー・センシティブな開発	日本福祉大学助教授 生江 明
9	12/2	開発と女性～NPO活動の可能性～1	
10	12/9	開発と女性～NPO活動の可能性～2	
11	12/16	身近な国際化～海外労働者問題～	名古屋カトリック国際協力委員会 野上 幸恵
12	1/13	今、私にできることは何か	

女性と社会 毎週火曜
16時40分～18時10分

回	月/日	テーマ	講師
1	10/7	オリエンテーション なぜ、社会における女性を考えるか	教授 園信 満子
2	10/14	女性差別撤廃条約にみる性差別の定義	
3	10/21	「女性の権利は人権である」 ～女性・男性の人権保護～	
4	10/28	産む性の自己決定権 ～生殖と人権～	
5	11/4	男性もとれる保育休暇の意義	
6	11/11	社会保障、年金にみる女性保護と差別の温存	
7	11/18	遺族年金をあてにする女性の人生	
8	11/25	女性の労働① ～パートタイマーはおいしい働き方か～	
9	12/2	女性の労働② ～女子学生就職難のわけ～	
10	12/9	性暴力を考える① ～セクシュアルハラスメントとは～	
11	12/16	性暴力を考える② ～新しい男女の間の性暴力～	
12	1/13	セクシズム(性差別主義)を乗り越えるには	

*申込締切9月20日(お問い合わせは愛知淑徳大学エクステンションセンターまで)



●編集後記●

1994年にジェンダー・女性学研究所発足して以来、開所シンポジウムを始めとして、ジェンダー・女性学研究的推進のために大学、研究者、地域の人々に向けてジェンダーの視点からのセミナー等を実施してきた。その意味で1996年度の文部省委嘱事業はまさにそのフルコースを実施したと言える。大学内外の多くの人々からの暖かい支援のおかげで成功裡に無事完了したことを重ねて感謝したい。1997年度は大学の研究所として地道に内部充実を目指したい。(K)